

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：32203

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K10896

研究課題名(和文) 新たな孫を迎える祖父母の家族役割機能を高める学習プログラム開発

研究課題名(英文) development and evaluation of a prenatal education course for grandparents in Japan

研究代表者

磯山 あけみ (Isoyama, Akemi)

獨協医科大学・看護学部・教授

研究者番号：00586183

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、新たに孫を迎える祖父母の役割の発揮を促す出産前教育を開発することである。出産前教育は、ADDIEモデルを用いて、ニーズ分析及び目的と構成を考案し、祖父母になる予定の男女を対象にオンラインによる動画視聴および親世代との対話を行うプログラムを構成した。男女100名(平均年齢62.5歳、有職69名)に対しプログラムを実施し、前後の認知および情意領域を評価した。結果、認知および情意領域の得点は介入後に有意に高かった。開発した祖父母への出産前教育は、新たに孫を迎える祖父母の役割に関する知識習得に役立ち、祖父母の役割の発揮に対する認識を高めることの有用性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で開発した出産前教育は、祖父母を育児の「支援者」と捉えるのではなく、祖父母としての役割を發揮する「主体」と捉え開発した。祖父母となる年代層は、これまでの生き方とは変化が生じてきている。日本では、これからも続く超高齢化社会に備え、必要な子育て施策の充実や、高齢者の健康を高める施策が検討されている。よって、開発した出産前教育を活用していくことは、母親となる女性の妊産婦のうつ病や自殺、乳幼児虐待が低減するための予防的介入のみならず、祖父母の生活の質を高めるための示唆を与える可能性がある。

研究成果の概要(英文)：Develop and evaluate a prenatal education course that encourages grandparents to fulfill their role in caring for a new grandchild in a balanced and healthy manner. The ADDIE model was used as the methodological framework for the prenatal education course, and needs analysis and definition of purpose and structure were performed. Cognitive and affective domains of the grandparents' role performance were measured before and after taking the course through a self-administered questionnaire. The program was administered to 100 men and women (mean age 62.5 years, 69 employed), and the cognitive and affective domains were evaluated before and after. Results of the intervention showed significantly higher scores in the cognitive and affective domains related to the grandparents' demonstration of their role. The prenatal education course helped demonstrated the usefulness of increasing awareness about the role of grandparents in a family.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：家族看護 祖父母 出産前教育

1. 研究開始当初の背景

近年、周産期や育児期家族の問題である、妊産婦うつや自殺、乳幼児虐待などが後を絶たない (Fairbrother et al., 2016; Falah-Hassani et al., 2016; 子ども家庭審議会, 2023)。新たな子どもの誕生は、男女が父母となり父母が祖父母となるなど、家族員の役割の変化と共に、発達課題が伴う (望月他, 1980)。これらの役割の変化に適応し、発揮するために、親となる母親や父親には、出産前教育が実施されている (Diotaiuti Pet al., 2022 ; Balasoitu AM ,et al., 2021;Hassanzadeh R,et al., 2019;Koushede V,et al., 2017)。一方、祖父母は両親を支える「支援者」と認識されており、祖父母の発達の観点から祖父母を主体とした出産前教育は開発されていない。祖父母が家族に関与すると、母親のメンタルヘルスや乳幼児の認知的発達に良い影響がある (Riem et al,2023 ; 小林, 2010 ; Sadruddin et al,2019)。祖父母が母親を支えると、出産後1年目の母親のメンタルヘルスの改善 (Riem et al,2023) および、身体回復や育児不安に解消に役立つ (小林, 2010)。また、祖父母が孫の世話を担うと、乳幼児の社会的・感情的・認知的発達が高まるということが明らかになっている (Sadruddin et al,2019)。

他方、祖父母にとって孫の世話は、生きがいの一つであり、孫と関わることが自分の体力の維持に繋がるなど、祖父母自身の心身の健康に良い影響を与える (Bordone, V ; 2017, Di Gessa et al., 2016;三反崎他, 2022)。これらのことから、祖父母が役割を発揮することが、祖父母自身はもちろんのこと、新たな児を迎える家族員の生活の質を高めることになるといえる。

新たな児を迎える家族の身近に存在する支援者は助産師である。しかしながら、助産師を対象とした祖父母への支援状況の調査の結果、祖父母の出産前教育を開催している病院は0.2%と低値であった (礪山他, 2014)。理由は、祖父母の育児支援の内容や方法は様々な扱い方をされ明確ではないことから (粕川他, 2013)、祖父母の役割や、現代の育児法を教育内容としたプログラムを考案し評価した (礪山他, 2016)。このプログラムは、祖父母の現代の孫育児の知識や技術の習得には役立ったが、親世代と孫の育児の支援者としての役割の理解に留まったことが課題であった (礪山他, 2016)。

新たな家族を迎える家族のための支援の主な目標は、家族全員が役割を発揮することにある。本研究の目的は、新たな孫を迎える祖父母を主体と捉え、祖父母の家族役割機能を高める学習プログラムを開発することにある。「祖父母の家族役割機能を高める」とは、祖父母が親世代とその家族との関係を築きながら、孫の世話、仕事や趣味、地域社会活動などの実践と調和をとり、自身の健康を維持向上することである。祖父母となる年代の人々は、平均寿命の伸長や (Ministry of Health, Labour and Welfare,2021)、定年の年齢の引き上げにより (Ministry of Health, Labour and Welfare,2020) これまでの生き方とは変化が生じてきている (北村, 2015)。日本では、これからも続く超高齢化社会に備え、必要な子育て施策の充実や、高齢者の健康を高める施策が検討されている (Meetings on a Social Security System Oriented to All Generations, 2022)。よって、この時期に新たに孫を迎える祖父母の家族役割機能を高める学習プログラムを開発することは、妊産婦のうつ病や自殺、乳幼児虐待が低減するための予防的介入に加え、祖父母の生活の質を高めるために示唆を与える可能性がある。本研究は、新たに孫を迎える祖父母の家族役割機能を高める学習プログラムを開発し評価することを目的とした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、新たな孫を迎える祖父母の家族役割機能を高める学習プログラムを開発することである。これまで新たな孫を迎える母親の支援者として捉えられていた祖父母を主体者として捉えなおし、家族役割機能を高める学習プログラムを実施し効果を検証する。具体的な研究項目は、(1) 新たな孫を迎える祖父母の家族役割機能および祖父母の健康および生きがい意識を明確化する。(2) 明確化した祖父母の家族役割機能を学習内容とし、新たな孫を迎える祖父母に対する学習プログラムを開発する。(3) 開発した学習プログラムを導入とし、祖父母の家族役割機能が高まるかを検証することである。本研究で祖父母が主体である家族役割機能を高める学習プログラムが開発されれば、出産準備教育や地域での高齢者の健康支援プログラムの一助になることが期待できる。

3. 研究の方法

(1) 新たな孫を迎える祖父母の家族役割機能の明確化

学習プログラムの内容や方法を検討するために、祖父母の役割機能、生きがい、健康について、インターネットによるアンケート調査を計画し、47都道府県の孫を持つ40代~80代の祖父母2000名、就学前の子をもつ親夫婦1000名に調査を実施した。

(2) 明確化した祖父母の家族役割機能を学習内容とし、新たな孫を迎える祖父母に対する学習プログラムの開発

学習プログラムは、ADDIEモデルを用いて、(1)の調査によるニーズ分析及び目的と構成を考案し、祖父母になる予定の男女を対象にオンラインによる動画視聴および親世代との対話を行うプログラムを構成した。

(3) 開発した学習プログラムを導入とし、祖父母の家族役割機能が高まるかの検証

男女100名に対し、(2)で開発した学習プログラムを実施し、前後の認知および情意領域を評価した。

4. 研究成果

(1) 新たな孫を迎える祖父母の家族役割機能および祖父母の健康および生きがい意識の明確化

乳幼児の孫を持つ祖父母の家族機能は、【孫の日常的な世話・ヘルスケア】【親夫婦の情緒的支援】【孫の人格形成】【自身の健康調和】の4因子(各因子の cronbach's α 、0.78~0.86)であった。祖父母の健康関連 QOL (SF-8) は標準以上の健康状態であった。身体的サマリースコア (PCS) および精神的サマリースコア (MCS) の結果より、祖父母にとり孫育児が身体的・精神的健康に影響していた。一方、親世代の半数は、子どもを預かってもらう、育児の相談に応じてもらっている、祖父母とは気兼ねなく何でも言える、関わってもらい助かる、依頼したら育児に加担してほしい、と認識していることが明らかになった。

祖父母の健康および生きがい意識は祖父母の身体的健康 (PCS) と精神的健康 (MCS) の平均 \pm 標準偏差値はそれぞれ 49.4 \pm 6.2 および 50.9 \pm 6.0 であり、国民標準値より健康レベルが高かった。祖父母の特性 (性別、年齢、同居、就労) は、祖父母の健康および生きがい意識と有意に関連していた。孫の世話、親夫婦への支援、家事などの祖父母によるサポートは祖父母の健康関連 QOL に関連がなかった。一方で、祖父母の負担感、祖父母の健康関連 QOL に低下に関連していた。孫との同居と孫の世話は、生きがい意識尺度の「未来に対する積極的・肯定的姿勢」の低下に関連し、「自己存在の意味の肯定的認識」の上昇に関連していた。

(2) 明確化した祖父母の家族役割機能を学習内容とし、新たな孫を迎える祖父母に対する学習プログラムの開発

学習プログラムの開発は、インストラクショナルデザイン教育設計の ADDIE モデル (Gagn'e, et al., 2005/2007) を選択し、新たな孫を迎える祖父母の役割の発揮を促すための学習の目的・目標、教育内容・方法および評価を検討した (図1)。まず、学習の目的、目標、用いる教材、教育内容を検討した。学習の目的は、祖父母自身が孫育児に関与することに自信をもち、親との関係を良好に保ちながら、家族全員が健康に生活するための準備ができる、とした。学習の目標は、祖父母の孫育児の現状、親の祖父母への期待の現状を知る、祖父母の役割を知り、自分の役割の発揮のあり方を考えることができる、祖父母としての役割のバランスのとおり方を考えることができる、祖父母と親世代が孫育児への考えを表明し共有できる、の4つを設定した。教育内容は、i 孫育ての社会的意義、孫育ての現状、孫育てが祖父母の健康や生きがいと与える影響、親世代から見た祖父母の孫育ての捉え方、祖父母の役割 (「日常的な世話ヘルスケア」「親世代の情緒的支援」「孫の人格形成」「自身の健康調和」)、自身の孫育児の意味の検討、祖父母と親世代が孫育児への考え方の共有とした。学習方法は、知識の修得として、オンデマンドの動画を視聴する方法をとった。理由は、対象とする祖父母は、学習の必要性を実感した時に学習しようとし、レディネスは社会的役割にフォーカスし、直近の課題や問題を解決するという特徴をもつ成人学習者であること (Malcolm S. Knowles 著 (1980) 堀薫夫、三輪健二監訳 (2002))、近年、COVID-19 もあり、集団研修が中止、縮小し、それに代わってオンラインの研修が主流となったことから (長坂他, 2020)、時間や場所を問わず視聴でき、何度も繰り返し視聴することが可能であるからである。1本の動画教材の視聴時間は、視聴者の集中力を勘案し10分程度とし、2本の動画を作成した。動画の作成は、メディア制作の専門家に依頼した。動画教材の補足は、教育内容が示されているテキストを作成し配布した。祖父母の役割の発揮のあり方を検討するには、自己の認知過程のモニタリングが必要であり、自己の考えを表明し、内省をすることにより可能である (Gagn'e, et al., 2005/2007)。よって、親世代に対し、祖父母が考える孫育児や、親世代が考える祖父母への期待等、お互いにディスカッションする機会を設け、自己の考えを表明し、内省のために自由記述シートを活用する方法をとった。

| 目標 | テーマ | 方法 | 内容 | 媒体 | 時間 |
|--------------------------------------|--------------------------|----------|---|-----------------|---------|
| 1. 祖父母の孫育児の現状、親の祖父母への期待の現状を知る。 | ・祖父母の孫育児の現状、親の祖父母への期待の現状 | 動画 視聴 | 孫育児の社会的意義、孫育児の現状、孫育児が祖父母の健康や生きがいと与える影響、親世代から見た祖父母の孫育児の捉え方 | 動画・ テキスト | 10 分 |
| 2. 祖父母の役割を知り、自分の役割の発揮のあり方を考えることができる。 | ・祖父母の役割 | 動画 視聴 | 祖父母の役割「日常的な世話ヘルスケア」「親世代の情緒的支援」「孫の人格形成」「自身の健康調和」 | 動画・ テキスト | 10 分 |
| 3. 祖父母としての役割のバランスのとおり方を考えることができる。 | ・祖父母の役割の発揮のあり方の検討 | レポ ート | 自身の孫育児の意味の検討 (孫育児のほかにどんな活動をしたいか。それぞれの活動におけるやりがいとは何か。) | 自由記 述シー ト | 30 分 |
| 4. 祖父母と親世代が孫育児への考えを共有できる。 | ・祖父母と親世代が孫育児への考えの共有 | レポ ート | 祖父母と親世代が孫育児への考え方の共有 | 自由記 述シー ト | 60 分 |

図1 新たな孫を迎える祖父母に対する学習プログラム

(3) 開発した学習プログラムを介入とし、祖父母の家族役割機能が高まるかの検証

男女100名(平均年齢62.5歳、有職69名)に対し、(2)で開発した学習プログラムを実施し、前後の認知および情意領域を評価した。対象者の年齢は、平均62.5歳(SD=7.4)歳、有職69名(69%)であった。祖父母の家族役割機能を高めることに関する認知領域の評価は、すべての項目で介入後に平均点が高く、「祖父母の孫育児の現状を知っている」「孫育児が祖父母の健康に及ぼす影響を知っている」「母親の情緒的支援の方法を知っている」「孫の日常的な世話について知っている」「親世代に対する関わり方を知っている」の項目で介入後に有意に得点が高かった。情意領域は、11項目において介入後に平均得点が高く、「孫育児を手伝いたい」「親世代の相談相手になれる」「孫育児をすることで自分自身の生活も楽しくなる」「孫育児が楽しみだ」「孫が生まれたら家事を支援したい」「孫育児が私にとって生きがいのひとつとなる」の項目で有意に得点が高かった。開発した祖父母への学習プログラムは、新たに孫を迎える祖父母の役割に関する知識習得に役立ち、祖父母の家族役割機能を高めることの有用性が示された。本研究で開発した学習プログラムは、祖父母を育児の「支援者」と捉えるのではなく、新たな孫を迎える祖父母を「主体」と捉え開発した。祖父母となる年代層は、これまでの生き方とは変化が生じてきている。日本では、これからも続く超高齢化社会に備え、必要な子育て施策の充実や、高齢者の健康を高める施策が検討されている。よって、開発した出産前教育を活用していくことは、母親となる女性の妊産婦のうつ病や自殺、乳幼児虐待が低減するための予防的介入のみならず、祖父母の生活の質を高めるための示唆を与える可能性がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 Isoyama A, Kinugawa S |
| 2. 発表標題 Supporting Parents Whose First Children Have Disabilities Become Parents to Two Children: The Significance of Holding Exchange and Consultation Sessions with Senior Mothers. |
| 3. 学会等名 7th WANS Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 礪山あけみ 衣川さえ子 |
| 2. 発表標題 乳幼児の孫を持つ祖父母の健康関連QOL (SF-8) とその影響要因 |
| 3. 学会等名 第42回日本看護科学学会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 礪山あけみ 衣川さえ子 |
| 2. 発表標題 就学前の孫を持つ祖父母の孫育児への加担状況と役割発揮に関する認識 |
| 3. 学会等名 第28回日本看護家族学会学術集会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 礪山あけみ 衣川さえ子 |
| 2. 発表標題 就学前の孫を持つ祖父母の孫育児への加担に関する関連要因の検討 |
| 3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 礪山あけみ 衣川さえ子 |
| 2. 発表標題 就学前の孫を持つ祖父母の孫育児への加担度及び負担感と生きがい意識との関連 |
| 3. 学会等名 第36回日本助産学会学術集会 |
| 4. 発表年 2022年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|--|----|
| 研究分担者 | 衣川 さえ子 (Kinugawa Saeko) (90538927) | 東京医療保健大学・看護学部・非常勤 (32809) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|